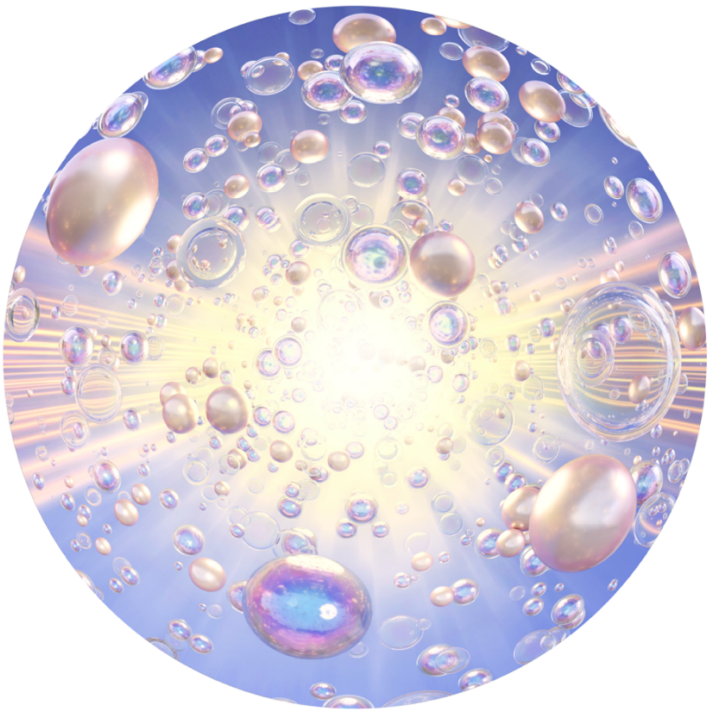
2026年9月24日

タイム堂ギャラリーオープニング展

森 万里子：Shrine II ― 内なる光のトポロジー
開催のお知らせ



Great Light Scroll 2024-2026

一般財団法人未来文化創造財団（代表理事：堀内貞良）は、「時間をつなぎ、価値を循環させる。」を理念に、文化を未来へ受け継ぐ「社会的資本」として育てることを目指し、2026年8月、京都で設立いたしました。
芸術や工芸、学術研究、地域文化、伝統技術などを対象に、創造・記録・保存・研究・発信・継承をつなぎ、その成果を次の創造へと循環させる仕組みを構築し、文化創造支援やアーカイブ、研究支援、教育・普及、地域文化継承の5つの事業を通じ、文化が持続的に発展する社会基盤づくりを進めます。
その財団の活動の一つとして、2026年11月、京都御所の西南にタイム堂ギャラリーをオープンし、「森 万里子：Shrine II ― 内なる光のトポロジー」を開催いたします。
10月31日（土）より森美術館では「森万里子：燦燦」が開催されます。ぜひ合わせてご高覧ください。

展覧会名： 森 万里子：Shrine II ― 内なる光のトポロジー
会期： 2026年11月6日(金) - 2027年3月31日（水）
開場時間：11:00-18:00
内覧会： 11月5日（木）（予定）
主催： タイム堂ギャラリー
会場： タイム堂ギャラリー（京都府京都市上京区春日町426–2）
キュレーション： 飯田高誉

森 万里子：Shrine II ― 内なる光のトポロジー



展示イメージ

CURATORIAL STATEMENT ｜ 展覧会ステートメント

現代社会が抱える深刻な分断と不安のただ中で、私たちは「個」という孤独の檻に囚われている。アーティスト・森万里子は、自らが体験した圧倒的な光の記憶――あらゆる次元へと遍く広がる、生命根源の無限なる愛の顕現――を通じて、人類が本来接続されているはずの宇宙的全一性を鋭く呼び覚ます。
本展の核となる《Shrine II》は、春日大社摂社・水谷神社の床下に鎮座する聖なる磐座（いわくら）へのオマージュであり、幾重にも配された几帳の中心に、クリスタル製の磐座が据えられるインスタレーションである。奈良時代以来、龍神信仰の霊地として崇められてきた水谷川の聖性をタイム堂の空間へと転移させる本作は、物質世界と背後の霊的世界とを媒介する「関係性のネットワーク（阿頼耶識）」の可視化に他ならない。
同時に展示される八点の掛け軸には、平安古筆の息づかいに身を委ね、光の体験が詞書として運筆されている。これは文字を単なる情報記号から、生命の脈動を宿した形而上学的な「持続（Durée）」へと開いていく試みである。

ティモシー・モートンが「ハイパーオブジェクト」と呼ぶ、制御不能で人間の知覚や時間・空間の尺度を超えた現象に直面する現代において、森が提示する「聖域」は、単なる日常からの逃避ではない。それは、私たち一人ひとりの内に厳然と存在する静かな光へと立ち返り、魂の永遠なる絆を再発見するための、最も批評的で崇高な思想的実践なのである。

COMPOSITION ｜ 展示構成と作品解説

本展は、空間の中核をなす立体インスタレーションと、壁面を囲む平面作品の共鳴によって、ギャラリー全体をひとつの「知覚の装置（アパラタス）」へと変容させる。

1.《Shrine II》—— 阿頼耶識（あらやしき）のインターフェース

本展の核となる立体インスタレーション《Shrine II》は、歴史の記憶が宿る聖なる磐座へのオマージュとして構築される。幾重にも配された几帳の中心に、クリスタル製の磐座が据えられる。古来より霊地として崇められてきた場の聖性を、京都・タイム堂の空間へと転移させる本作は、古代のアニミズムと、現代の洗練された造形実践がキアズマ（交差）する地点である。無数の光を反射・屈折させるクリスタルの輝きと、几帳のたなびきは、目に見えない次元のエネルギーを現前させ、鑑賞者の意識を深層の阿頼耶識へと接続する。

2. 八点の掛軸 —— 持続（Durée）の運筆

空間の周囲には、八点の掛け軸が展観される。平安古筆の息づかいに身を委ね、アーティスト自身が体験した光の記憶が、詞書として運筆されている。意味を伝達するための単なる情報記号としての文字を脱構築し、筆跡の微細な震えや墨の濃淡を通じて、生命の脈動を宿した形而上学的な「持続（Durée）」へと還流させる試みである。時間の経過とともに変容する自然光の中で、和紙と墨が織りなす空間は、鑑賞者の内なる記憶と静かに共鳴する。

CONTEXT ｜ 「日常」と「永遠」を繋ぐ位相空間

歴史の重層性と人々の営みの息づかいが交差する京都・タイム堂。この固有のトポロジーを持つ空間の只中に、森万里子の《Shrine II》が出現することに本展の決定的な意義がある。
ここで提示される「聖域」は、外部から切り離された非日常のアートスペースではなく、京都御所を目前に望む、タイム堂という固有の歴史的・地理的文脈のなかに置かれることで、静かな必然性を獲得する。千年にわたり時の積層と人々の営みを受け入れてきた、京都というこの土地の記憶は、森の《Shrine II》が内包する古の霊性と深く共鳴する。
聖なる光は決して遠い彼方の概念ではなく、この街の日常と地続きの歴史の内に厳然と息づいている。御所の緑陰と、現代の時間が交差するタイム堂という場が媒介となることで、作品は鑑賞者の「内なる光」へと、ごく自然に浸透し、自己と世界を静かに繋ぎ直す親密な体験として立ち上がるのである。



Photo by David Sims

森 万里子　存在の根源的な問いを探求し、人類と宇宙との関係を考察する作品で知られる、国際的に高く評価されている多分野にわたるアーティスト。彼女の大規模なパブリックアートは、先端技術と古代の象徴を融合させ、精神的なつながりと生態系への意識を呼び起こす。精神性の探究と未来的な美学を結びつけることで、自然、人類、そしてテクノロジーが調和する関係性を描き出している。2003年に発表された没入型インスタレーション《Wave UFO》により国際的な注目を集め、クンストハウス・ブレゲンツ、第51回ヴェネチア・ビエンナーレをはじめとする世界各地の主要美術館で展示された。2007年から2011年にかけて開催された個展《Oneness》は、ヨーロッパ、南米、アジアを巡回し、2011年にはリオデジャネイロのブラジル銀行文化センターにおいて、累計538,328人の来場者を記録し、同年世界で最も多くの来場者を集めた現代美術展となった。

森はこれまで、ロイヤル・アカデミー・オブ・アーツ（ロンドン、2012年）、ジャパン・ソサエティ（ニューヨーク、2013年）、東京都現代美術館（2002年）、ポンピドゥー・センター（パリ、2000年）、ブルックリン美術館（ニューヨーク、1999年）、シカゴ現代美術館（1998年）など、世界の名だたる美術館で個展を開催している。また、ニューヨーク近代美術館（MoMA）およびソロモン・R・グッゲンハイム美術館など、主要美術館のパーマネントコレクションにも作品が収蔵されている。2025年には、大阪・関西万博にてパブリックスカルプチャー《Cycloid III》が公開され、ウィメンズ・パビリオンには《Peace Crystal》が展示されている。

タイム堂ギャラリーについて

タイム堂ギャラリーは、京都御所の南西角に位置する大正期に建てられた町家二棟——戦前から続く時計店「タイム堂」と、喫茶「アスカ」だった建物——を結び、一つのギャラリーへと再生しました。
時を刻む店舗と、人が集う喫茶。その来歴が「時間をつなぎ、価値を循環させる」理念と静かに響き合います。
タイム堂ギャラリーは、作家、工芸家、研究者、市民が出会い、つくり、考え、語り、その成果を社会へひらく最初の実践拠点として、展示や対話、共同制作、記録を通じて新たな文化的価値を育み、次の創造へとつなぐ場を目指します。



タイム堂ギャラリーは森万里子展以降、以下の展示スケジュールを予定しています。
2026年11月　森 万里子：Shrine II ― 内なる光のトポロジー
2027年春　　企画展
　　6月頃　杉本博司展
　　夏　　企画展
　　11月頃 草野絵美キュレーションによるグループ展

タイム堂ギャラリー概要
住所；京都府京都市上京区春日町426-2
面積：北棟 延115.82㎡　南棟 延82.32㎡
設計：株式会社丹青社 万井 純
URL：https://timedo.jp/

一般財団法人未来文化創造財団
設立日：令和8年8月8日
代表理事：堀内貞良
理事：小森隆司、本田恵理子
評議員：和田洋一、西村勇哉、占部まり、堀内照弘
住所；京都府京都市上京区春日町426-2
https://ffcf.jp/
資料：https://x.gd/HNtp8

広報に関するお問い合わせ　株式会社いろいろ press@iroiroiroiro.jp
プレスリリース、広報用画像　https://x.gd/QsVbK